

# 日本文化と「恥」意識に関する一考察

発表者 梶原 未有  
指導教員 上地 勝

キーワード：日本文化、恥、「菊と刀」、集団主義

## 1. 緒言

近年、グローバル化が急速に進み、様々な問題に対して地球規模で取り組む時代となってきた。その結果、世界の多くの地域で多文化背景を持った人々と出会うことが日常的になってきた。法務省が発表した在留外国人数や文部科学省が発表した外国人生徒数も年々増加傾向にある。この時代、異文化を背景にもつ人々と円滑にコミュニケーションをとれる能力や意欲が求められる。人のコミュニケーション行動を理解するためには、その背景にある文化の価値観を理解することが必要である。また、自身が経験した海外での出来事から、日本人には集団の中での間違いを極度に恐れる特有の行動があるのではないかと感じた。さらに、ルーズ・ベネディクトの著書である『菊と刀』<sup>1)</sup>で、“日本文化は「恥の文化」である”とされていることから、自身が経験した海外での出来事においても、ベネディクトの指摘した「恥の文化」が関係しているように思える。そこで、本研究では、ベネディクトの指摘した、日本の「恥」の文化の本質を、日本の文化論に基づいてさぐり、それが日本社会にどのような影響を及ぼしているのかを、文献をたどりながら考察する。

## 2. 日本文化とは

### 2-1 「文化」概念について

「文化」という概念は、明確な対象を指す概念ではなく、その探求を方向づける指針の役割を果たすものだと考えたほうが良いとされる<sup>2)</sup>。さまざまな習慣や行動の背景にあるものとしての文化の概念は、違いとその由来をより明確にとらえようとする探求の単なる出発点であり、どこに探求の照準を合わせるべきかの指針にすぎない。文化の違いについて、これまで多くの学者にとって、「文化が違うということは、現実をとらえる概念体系が異なっており、また現実に対する価値判断の基準も違っている」ということを意味していた<sup>2)</sup>。文化が違うということは、かなり根本的なレベルで違っているということになる。

## 3. 「恥」がおよぼす影響

### 3-1 「恥」の本質

「日本文化＝恥の文化」と定義づけたのは、『菊と刀』の著者であるルーズ・ベネディクトである<sup>1)</sup>。ベネディクトが、様々な日本での調査の中で、日本の文化は外的な批判を意識することを意味して「恥」と定義づけた。これに対して、欧米の文化を内的な良心を意識する「罪の文化」と述べた。ベネディクトは、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚に基づいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行う」と述べたうえで、「恥は他人の批評に対する反応である」と述べている<sup>1)</sup>。また、永房によると、「恥」

は、「自己意識感情 (self-consciousness emotion) のひとつであり、同じ自己意識感情である『共感』の高さも恥感情の高さに影響するといわれる。さらに、恥は、「自己評価を参照した結果として生じる感情」とされている。向坂<sup>3)</sup>によると、「恥」意識は「人が内密にしたいと思っている自分の劣等部分が人前に露呈した時、またそう予想した時に感じる感情」である「公恥」と、「永遠的なものからの距離意識に由来する恐怖」である「自恥」の二つに大別されるという。さらに向坂は、「恥」について「世間の目・社会の目を避けようとする一種の恐怖心であり、現象的には社会の目と自己の目の対応の中で生まれる」と言及している。また、「恥」と「恥ずかしい」という言葉については、「恥」の感情を表す一つの言葉に「恥ずかしい」という表現があるとされている。

### 3-2 しぐさに与える影響—はにかみ—

多田によると、恥らしいは、「はにかみ」の一種の発展形態であるとされている<sup>4)</sup>。「はにかみ」は、『新明解国語辞典』(三省堂)によると、「はにかむこと。はにかんだようす。」と、記されている。また、「はにかむ」とは、「恥ずかしがる。恥ずかしそうな表情をする。」という意味である。民俗学者の柳田によると、日本人の「はにかみ」が起源となっている遊びに、「にらめっこ」があるという。柳田の著作によると、にらめっこという遊びの起源は日本人の「はにかみ」であり、人と会うときの緊張をほぐすための「練習」だという。日本人は、目をそらすしぐさをよくしがちであるが、多田によると、「これは、『はにかみ』にともなう自然な表情」なのであるという。「はにかみ」は「恥」の意識から発生する対人緊張を避ける一種の表現であるとも考えられる。

### 3-3 学校・教育に与える影響

ベネディクトは、日本の学校に対して、「学校が生徒のことよりも学校の評価ばかりを気にしているというのは、多数の中高生が持つ不満となっているが、個人の権利保障という正義よりも集団の組織の名誉を優先するという点において『恥の文化』は日本の学校では根強いものがあるといえる」と述べている<sup>1)</sup>。また、許は「学生個人が集団から高度な協調性を強く求められているため、個性を抑制して集団の一員として、自主的に組織の『和』を維持するようにふるまう。そこでは自己責任という言葉はほぼ通用しない。学生の言動は学校に関連があり、個人の受賞や有名校への進学実績は個人ではなく学校の名誉になる」と論じる。児童生徒間でおこるいじめの問題についても、「外れる」ことを「恥ずかしい」と思う恥を引き起こしている原因が関連しているのではないかと、許・高野は論じる。一方、中学校における規範意識の育成

について研究した中大路は、「恥の文化」は、子供たちの規範意識育成に大きな意味を持っていると述べる。近年、核家族の増加等によって地域のつながりが希薄化していることにより、「恥」意識が薄れていると同時に規範意識も低下していると述べている。

#### 4. 「恥の文化」の背景

##### 4-1 「集団主義」的な日本人

日本文化を「恥の文化」であるとしたベネディクトの『菊と刀』が、「集団主義」という用語こそ使用していないものの、「集団主義的な“国民性”が日本の全体主義的な政治統制の源泉であるという見解を表明したものと解釈されてきた」と高野らは述べる。ここに、「恥の文化」の背景には、「集団主義」が在るだろうと考えられる。高野は、「日本人論の内容は様々だが、『日本人は集団主義的だ』という認識は、戦後にあらわれたほとんどの日本人論に共通しているといえる。いわば、日本人論の『基本テーゼ』である」と述べている。さらに彼は、「日本人＝集団主義」であるとの通説が生まれた理由の一つとして、「軍国主義」を挙げている。また、集団主義について分析した古家は、集団的な「ウチ」を意識する「ウチとソト」の関係、また日本の風土の関係から個人の力だけでは対応しきれないためにできた「村社会」が集団主義に関連しているとしている。

##### 4-2 「日本＝集団主義」という通説への疑問

日本について論じる時、日本は集団主義であるという通説に基づかれていることが多い一方で、これについて否定的な文献も存在する。高野は、アメリカと日本で比較したいくつかの実証的研究を著書で挙げ、「日本人はアメリカ人より集団主義的であるとはいえない」と述べている。また、山岸は、「日本＝集団主義、欧米＝個人主義」と定義づけることに対して、「人々が集団と心理的に一体化している心の状態」を「西欧的集団主義」とし、日本は集団主義といえども「集団への義務と集団内部での協調を重視し、生活の場としての重要性を感じている」のが日本的集団主義の特徴だと述べている。

#### 5. まとめ

本論文では、文献を用い、日本の文化論の変遷をたどりながら「恥」に焦点を当てて研究し、その文化が日本社会においてどのような影響をもたらしているのか概観した。緒言で述べたように、自身の体験や観察から日本人の行動には「恥」の意識が強く影響しているのではないかという疑問から始まった研究である。まず、第二章では、「恥」の意識を持つことが「日本特有のもの」であるされる所以には、他国と比較した際の日本がもつ文化独特のものがおおいに関連しているのだと考え、著名な日本文化論に触れながら、「文化」とは何かについて論じた。次に、ベネディクトがなぜ日本を「恥の文化」と定義づけたのか、「恥」の本質とは何かについて論じた。ここでは、「恥」の意識は他者と自己が存在することが前提で生まれるもの

であり、また、他者に対する一種の恐怖心であることがわかった。さらに、しぐさ、学校、教育への影響について論じた。第四章では、「恥」の背景のひとつとして推測される「集団主義」について論じた。また、「日本＝集団主義、欧米＝個人主義」という通説を覆すような研究もされていることについて論じた。

以上から、緒言で述べた日本人に特有だと思われる行動について、他者からの目（評価）を気にしたり、失敗を極度に恐れてしまったりと、日本人の行動とは一概には言えないが、「恥」の意識が根付いているのではないかということが考察される。さらに、「恥」の意識の背景には、日本が戦争していた時代に根付いた集団主義があるのではないかと推測したが、研究を進めていくうちに、日本を集団主義と定義づけることは難しいことが明らかになった（図1）。

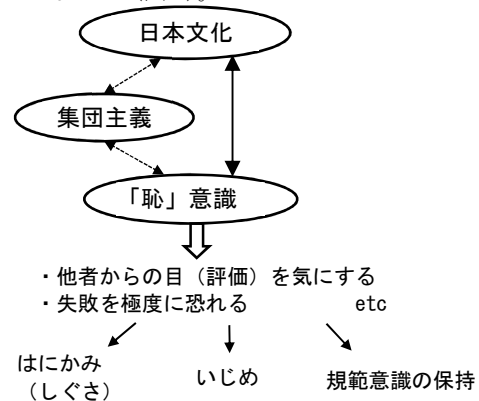


図1 「恥」の構造モデル

今回は、文献のみでの研究であるため、多様な角度からの考察はできるものの、研究者により意見の相違が出てしまう。今回は、日本人には「恥」意識があるという見解が強い論文がほとんどであったが、これに関しては未だ議論が続いていることも明らかになった。また、日本の教育現場の現状について「恥」の視点で切り取ってみたいかったが、十分にできなかった。今後は、教育学、心理学、など様々な分野から、他国との比較データをとった上で日本文化における「恥」について考察することが必要だと考えられる。また、これからますます進んでいこうグローバル社会において、多文化間でのコミュニケーションを発展させるためにも、学校教育において、自国の文化に興味を持たせ、理解しようとする力を養っていく教育が一層求められるのではないかと考えられる。さらに、「普通」とされていることを客観的に再度見直すことで、学校や社会等においても新たな課題が見えてくるのではないかと考える。

#### 6. 文献

- (1) ルーズ・ベネディクト、角田安正訳（2008）：菊と刀、光文社
- (2) 山下晋司、浜本満（1997）：文化人類学キーワード、有斐閣
- (3) 向坂寛（1982）：恥の構造、講談社
- (4) 多田道太郎（2014）：しぐさの日本文化、講談社